

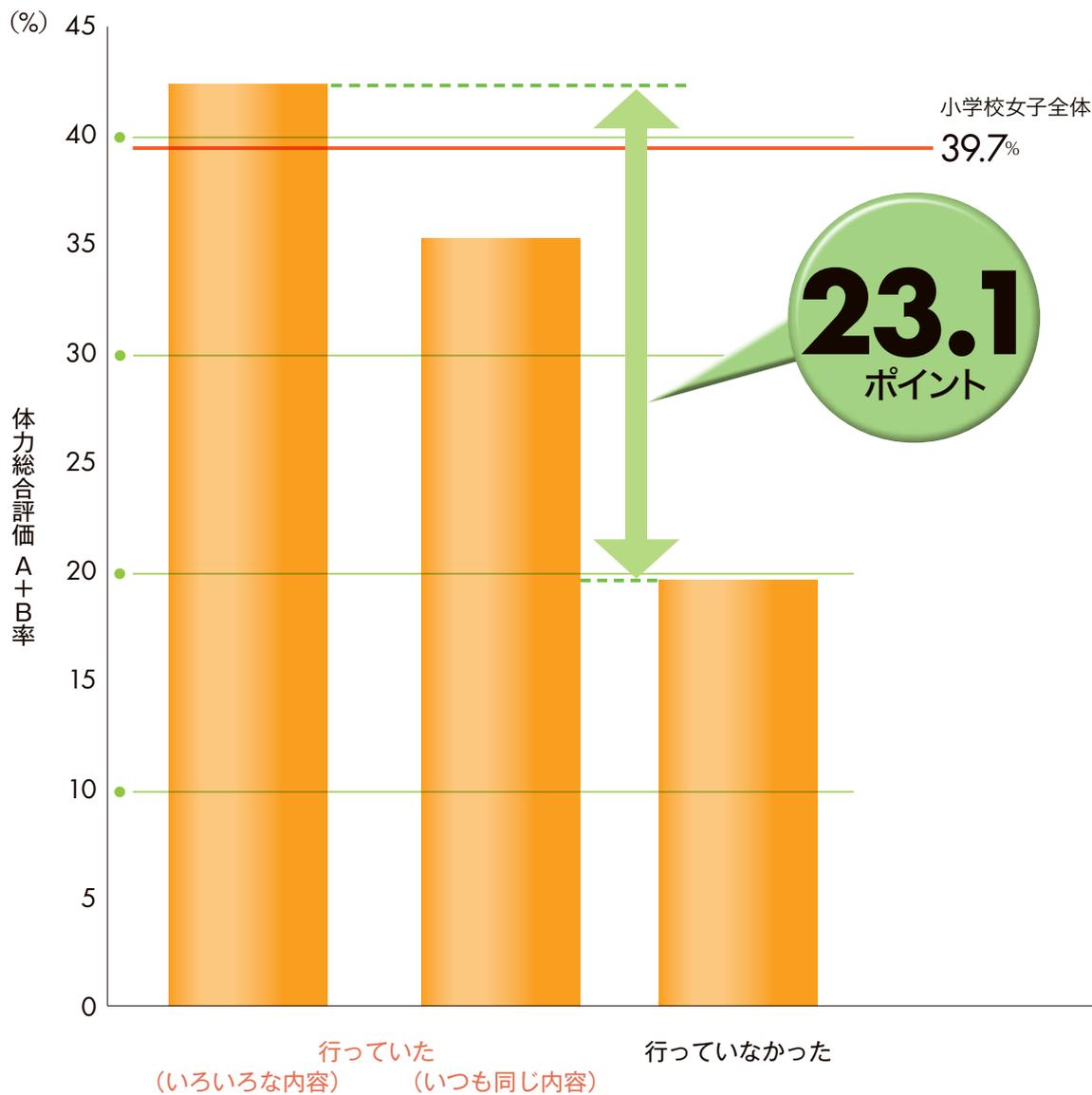
分析結果と 取組事例

テーマ 1	幼少期の 多様な運動経験	分析結果のまとめ	8
		事例報告のまとめ	12
		事例 1 北海道標津町教育委員会	14
		事例 2 島根県雲南市教育委員会	16
テーマ 2	体育・保健体育の 授業の充実	分析結果のまとめ	20
		事例報告のまとめ	24
		事例 3 東京都文京区立林町小学校	26
		事例 4 兵庫県姫路市立別所小学校	28
		事例 5 秋田県大館市立第二中学校	30
テーマ 3	部活動の充実	分析結果のまとめ	34
		事例報告のまとめ	38
		事例 6 千葉県習志野市立津田沼小学校	40
		事例 7 東京都港区立港南小学校	42
		事例 8 茨城県日立市立河原子中学校	44
		事例 9 埼玉県三郷市立彦糸中学校	46
テーマ 4	家庭や地域でもっと 運動をするようになる 条件整備	分析結果のまとめ	50
		事例報告のまとめ	54
		事例 10 熊本県御船町立御船小学校	56
		事例 11 新潟県阿賀野市立笹神中学校	58
		事例 12 宮崎県小林市立野尻中学校	60
テーマ 5	生涯にわたって 運動やスポーツを しようとする意欲	分析結果のまとめ	64
		事例報告のまとめ	68
		事例 13 茨城県利根町立布川小学校	70
		事例 14 熊本県熊本市立向山小学校	72
		事例 15 茨城県城里町立桂中学校	74
		事例 16 鹿児島県奄美市立名瀬中学校	76

■ 小学校入学前の体を動かす遊びの経験と 体力総合評価（小学校女子）

小学校5年生女子の体力総合評価のA+B率は、小学校入学前に体を動かす遊びを行っていた中でも「いろいろな内容」の群で42.8%と最も高く、「いつも同じ内容」の群よりも7.7ポイント、体を動かす遊びを「行っていなかった」群よりも23.1ポイント高かった。

男子でも同様の傾向がみられた。



小学校入学前の体を動かす遊び

	有効回答数
いろいろな内容	360,468
いつも同じ内容	93,735
行っていなかった	31,383

小学校5年生女子で、入学前にどのように体を動かす遊びをしていたか（「いつも同じ内容」「いろいろな内容」「行っていなかった」）への回答別に、体力総合評価のA及びBの割合の合計（A+B率）を比較した（→p.135 児童図）。

小学校入学前から運動が好きであった児童の多くは、小学生になっても運動が好きである傾向は、昨年度の分析からもうかがえた。また、小学校入学前から運動が好きな児童は、きらいだった児童に比べ、運動時間が長く、体力合計点も高い

傾向がみられた。

同様に、小学校入学前にいろいろな内容の運動を行った児童は、いつも同じ内容の運動を行った児童や、運動を行っていなかった児童に比べ、運動時間が長く、体力合計点も高い傾向がみられた。

事例では、児童で継続できる運動プログラムの実施や、小学校入学前の幼児を対象とした体力測定会にあわせた運動体験会の開催など、幼児への働きかけの推進で成果を上げている自治体の取組を紹介する。

| テーマ |

1

幼少期の 多様な 運動経験

児童生徒の運動能力や運動時間、運動やスポーツに対する意欲や関心、体を動かすことへの親しみは、幼少期の運動習慣や意識とどのように関係しているだろうか。また、同じ内容の運動に取り組むことと、いろいろな内容の運動に触れることには、何か違いがあるだろうか。幼少期の多様な運動経験の影響という観点から、集計結果をみた。

幼少期の運動経験が 体力・運動能力に及ぼす効果

小学校入学前の運動の状況 —8割以上が多くの運動経験あり—

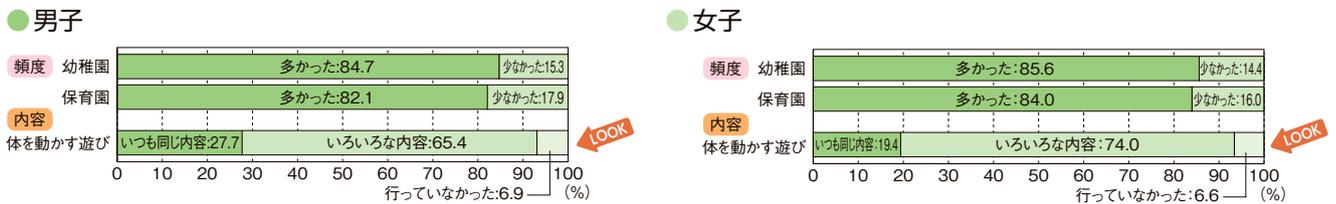
児童に小学校入学前の運動経験の多少を尋ねた結果、幼稚園、保育所に通っていた男女ともに、約85%の児童が「多かった」と回答した。誰とするかについて、「家の人と」「地域の子供たちと」体を動かす遊びをすることが多かったと回答した児童

は、男女ともに約60%であった(→p.134 児童24-1,24-2,24-3)。一人遊びや家の人以外の大人、あるいは地域以外の子供たちなど、体を動かす遊びをしていたことも考えられる。

また、体を動かす遊びの内容を尋ねた結果では、「いろいろな内容」と回答した児童が、男子で65.4%、女子で74.0%と大半を占めた。「いつも同じ内容」と回答した児童は、

男子で27.7%、女子で19.4%であった。ここで、「体を動かす遊びは行っていなかった」と回答した児童が男女ともに約7%みられたことから、前述の体を動かす遊びの多少に対する回答と照らし合わせると、体を動かす遊びが「少なかった」と回答した児童の約半数が、実際には体を動かす遊びをしていなかったことになる(図1-1)。

[図1-1] 小学校入学前の体を動かす遊び (児童24-1・25)

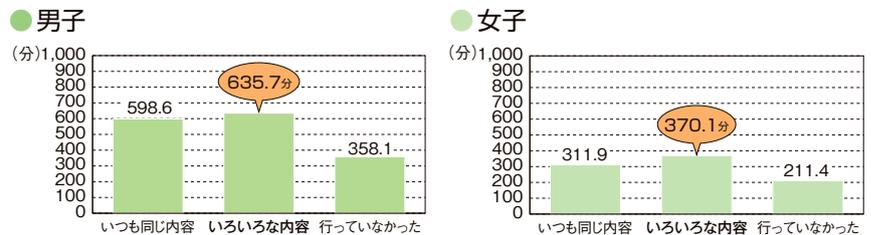


小学校入学前の多様な運動経験と 現在の運動習慣、体力・運動能力

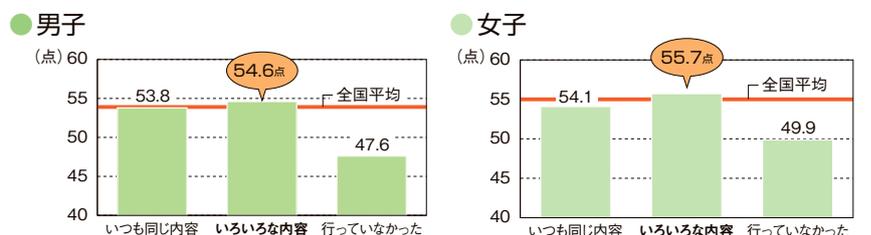
これらの運動経験は、その後の児童の意識や運動習慣、体力・運動能力等にどのような影響を与えるのだろうか。ここでは、小学校入学前の運動経験別に、現在(小学校5年時)の状況を比較して考えてみたい。

まず、小学校入学前にどのように体を動かす遊びをしていたかの回答別に、1週間の総運動時間を比較した。「いろいろな内容」と回答した児童は、男子で635.7分、女子で370.1分と最も長く、次いで男女ともに「いつも同じ内容」と回答した児童が、男子で598.6分、女子で311.9分であった。これに対して、「体を動かす遊びは行っていなかった」と回答した児童が、男子で358.1分、女子で211.4分と大きく下回っていた(図1-2)。

[図1-2] 小学校入学前の体を動かす遊びの内容と現在の1週間の総運動時間との関連 (児童25)



[図1-3] 小学校入学前の体を動かす遊びの内容と現在の体力合計点との関連 (児童25)



また、同様に体力合計点との関連では、「いろいろな内容」と答えた児童の体力合計点は男子で54.6点、女子で55.7点と最も高く、次いで「いつも同じ内容」と回答した男子で

53.8点、女子で54.1点であった。これに対して、「体を動かす遊びは行っていなかった」と回答した児童が、男子で47.6点、女子で49.9点と全国平均を大きく下回っていた(図1-3)。

小学校入学前の体を動かす遊びの好き・きらいと現在の運動習慣

小学校入学前に体を動かす遊びが好きだったかについては、「好きだった」「やや好きだった」と回答した児童が、男子で89.9%、女子で86.7%といずれも高かった(図1-4)。

小学校入学前の体を動かす遊びの好き・きらいと、現在の1週間の総運動時間との関連をみると、1週間に420分以上の運動を行っている男子の割合は、「好きだった」と回答

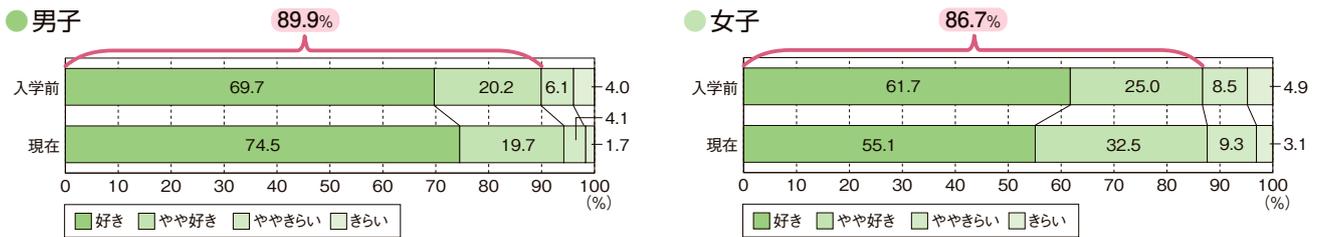
した児童では64.8%、「きらいだった」と回答した児童では35.0%であり、その割合は、2倍程度の違いがある。女子も同様の状況がみられるが、「好きだった」場合が36.9%、「きらいだった」場合が17.5%と、それぞれ男子の約半数であった(図1-5)。

また、現在、運動やスポーツをすることが好きかについて、「ややきらい」「きらい」と回答した児童にその理由をたずねたところ、「小学校入学前から体を動かすことが苦手だったから」との理由が男子50.0%、

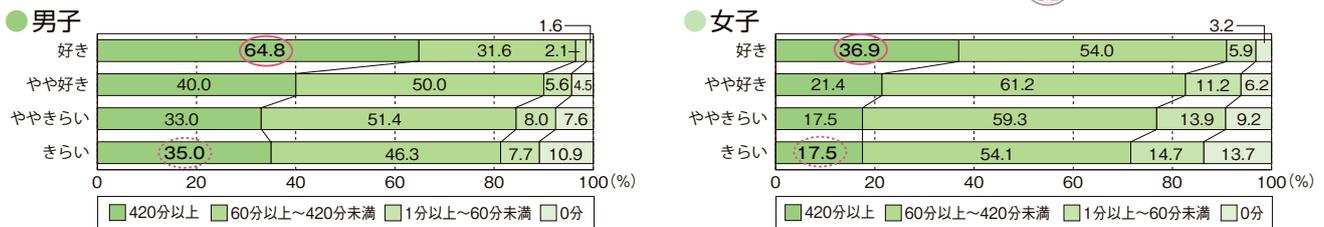
女子59.9%と最も高かった(図1-6)。

以上のことから、男女ともに、幼少期の運動経験や好き・きらいがその後の運動習慣や体力・運動能力に大きな影響を与えていることがうかがえる。また、単一の運動よりも、様々な運動を経験することが、より良い効果をもたらすことも期待できる結果が得られた。幼少期に多様な運動やスポーツに親しみ、運動をする意欲を高めていく取組が重要である。

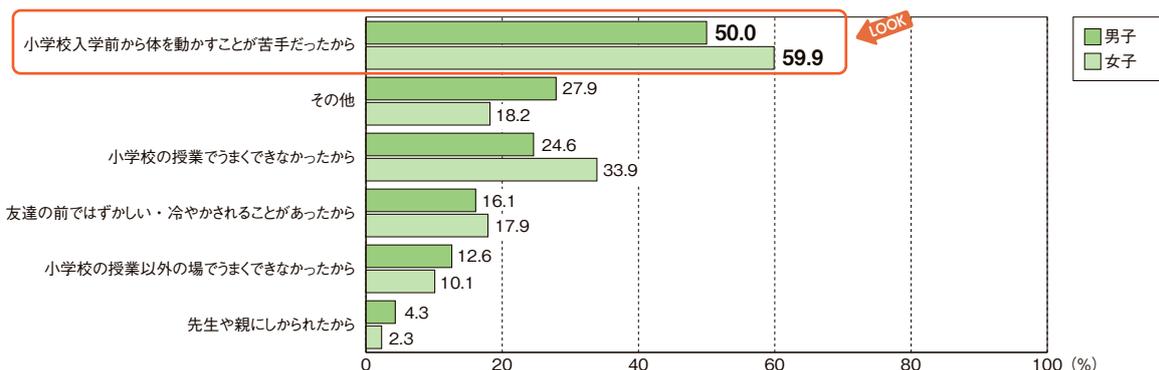
[図1-4] 小学校入学前と現在の運動に対する意識の比較(児童1・23)



[図1-5] 小学校入学前の運動に対する意識と現在の1週間の総運動時間との関連(児童23)



[図1-6] 運動やスポーツが「ややきらい」「きらい」と回答した児童の、運動がきらいになったきっかけ(児童1-2)



幼少期の運動経験を支える取組

学校における 低学年からの取組

学校の新体力テストの実施状況を見てみよう。これまでの実施期間は、小・中学校ともに80%以上の学校が「6年以上」継続して実施していると回答した。また、本調査対象学年以外の学年でも、60～80%の割合で実施されていることがわかった（→p.177 学校22,22-3）。

また、小学校において本調査の対

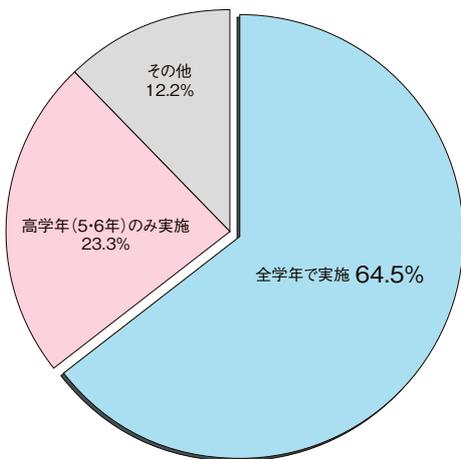
象である5年生のみで実施している学校は19.2%であった。それ以外の実施学年の内訳をみると、6年生を含めた高学年（5・6年）でのみ実施している学校が23.3%、全学年で実施している学校が64.5%、その他の学年の組み合わせで実施している学校が12.2%であった（図1-7）。これらの実施学年の内訳別に、学校の体力合計点の平均、体力総合評価の割合、1週間の総運動時間の60分未満率・420分以上率を比較したところ、「高学年

のみ実施」している学校が最も低く、次いで「その他」の学校、「全学年で実施」している学校で最も良い結果が得られた（表1-1,図1-8）。さらに、「その他」の学校の中でも、低学年（1・2年）から実施している学校の方が、より良い結果が得られている。

これらのことから、児童の体力・運動能力について早期から実態を把握することの大切さがうかがえ、指導の改善や取組の工夫につなげることが期待される。

[図1-7] 小学校の新体力テスト実施学年の組み合わせ（学校22-3）

● 小学校



[表1-1] 小学校の新体力テスト実施学年別体力・運動時間

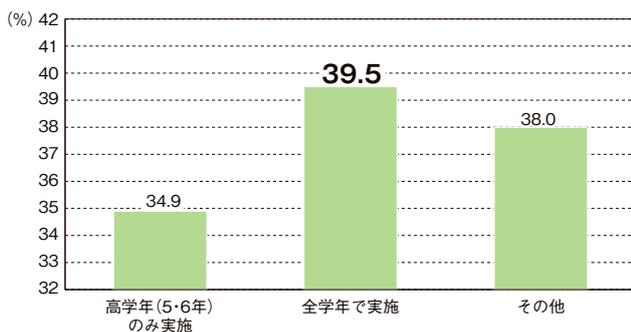
● 小学校

	全体	高学年(5・6年)のみ実施	全学年で実施	その他
有効回答件数	20,650	4,814	13,325	2,511
回答比率	100.0%	23.3%	64.5%	12.2%
< 平均値 >				
体力合計点 男子	54.25	53.4	54.6	54.0
体力合計点 女子	55.79	54.8	56.1	55.7
総合評価 AB 率 男子	38.32	34.9	39.5	38.0
総合評価 AB 率 女子	43.78	39.5	45.3	43.2
総合評価 DE 率 男子	28.06	31.3	26.9	28.6
総合評価 DE 率 女子	22.87	26.4	21.5	24.1
総合評価 AB 率・DE 率 男子	10.26	3.7	12.6	9.4
総合評価 AB 率・DE 率 女子	20.90	13.1	23.8	19.2
総運動時間 60分未満率 男子	6.24	7.3	5.8	6.7
総運動時間 60分未満率 女子	12.80	13.7	12.4	13.4
総運動時間 420分以上率 男子	56.58	55.2	57.2	55.6
総運動時間 420分以上率 女子	31.91	30.9	32.3	31.7

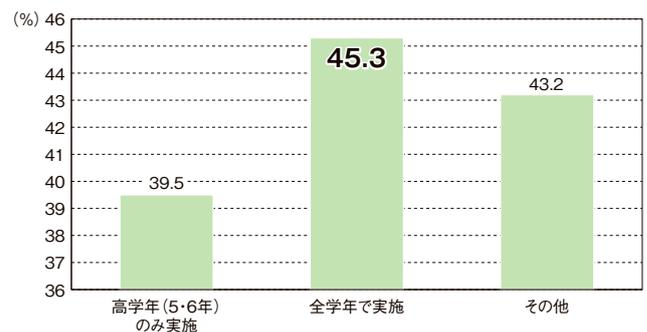
※学校ごとに児童生徒の回答を集計し、得られた値（平均または回答比率）をもとに算出している。

[図1-8] 小学校の新体力テスト実施学年の組み合わせと体力総合評価A+B率との関連（学校22-3）

● 男子



● 女子



教育委員会と地域の幼稚園・保育所との連携

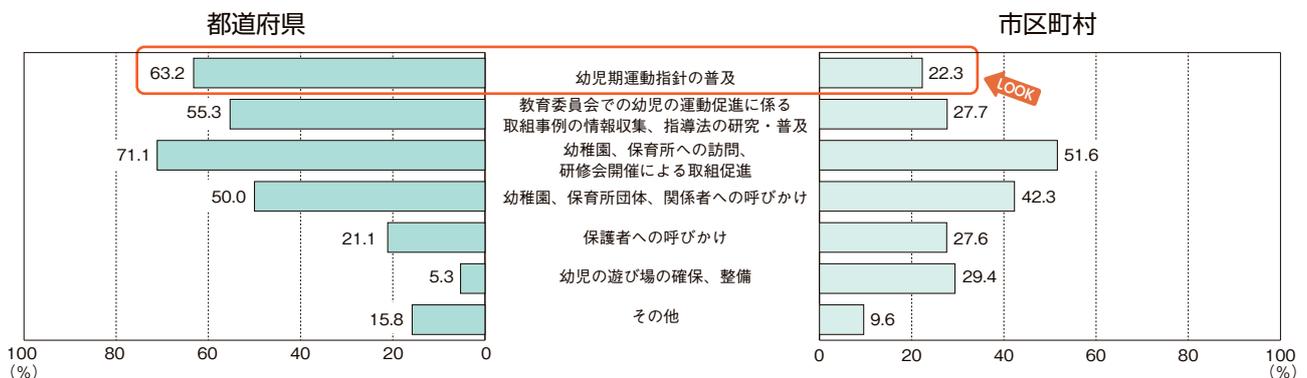
幼児の運動促進に取り組んでいる（取り組む予定である）教育委員会は、都道府県では80.8%、市区町村では34.3%である（→p.182 教委6）。

取組内容の内訳をみると、幼児期運動指針の普及に取り組んでいる教育委員会は、都道府県で63.2%であるのに対し、市区町村では22.3%と非常に少ない（図1-9）。

児童の運動習慣や体力・運動能力の向上には、幼児期の運動経験が大

きな影響を与えることが明らかことから、小中連携はもちろんのこと、地域の幼稚園・保育所を巻き込んだ校種間連携を積極的に進めていくことが重要な課題であると思われる。

[図1-9] 幼児の運動促進の取組を実施している（する予定である）教育委員会の取組内容（教委6-2）



幼児期運動指針ガイドブックより

文部科学省の調査では、体力の向上への基礎づくりを行った実践園と行わなかった協力園を卒園した児童を追跡し、卒園後（小学1年生）の運動の頻度や運動部の活動・スポーツクラブへの加入率及び新体力テストの結果を調べた結果、幼児期によく体を動かして遊ぶ経験をした子供は、その後も活動的な傾向にあることがわかった。

子供の体力・運動能力は、活発に体を動かして遊ぶ習慣や規則正しい生活習慣の影響が積み重ねられて徐々に向上する。生涯にわたる心身の健康づくりの視点からも、まずは幼児が体を動かす楽しさに触れ、その継続による運動習慣づくりに努めることが大切である。

